D－10　児童の生活構造の時代的変遷に関する研究（第3報）その1．過疎地域における調査方法について

大妻女大家政　○平井信義，石井とめ子，石橋すみえ，今井節子，馬場吉三，大石まりる，大竹智恵子，
鈴木真一，関真知子，仙波千代，千羽喜代子，前川当子，森上史朗，八倉巻和子

目的．過密，過疎の両地域における児童の生活構造の実態，およびその変遷を知り，それらが，次代の担い手である児童の心身発達にいかなる影響を与えているかを考察することにより，些かなりとも未来学的思考を試みているが，今回は，とくに過疎地における3回の調査を通じて，調査方法上の問題について反省を加えたので，昨年本学会においてご指摘のあった点に加えて，報告する．

1．家族形態は，都市においては「核」が，農村においては「拡大」が多く，前回は，それらを分けずに整理したが，今回は，両者の核家族について比較を行い，さらに，都市生活経験者とそうでない者とに分け，生活構造や養育態度にどのような差異をもたらしているかについて検討した．

2．過疎地において3回の調査を重ねるに従い，①，過疎地においても，中心部と周辺部においては，児童の生活構造が著しく異っていること，②，季節によって，戸外遊びやテレビ視聴の時間が異っていること，③，母親が就業しているために，具体的な生活内容について知っていないので，今回は，子ども自身に面接質問を行ったが，これにも客観性が乏しいこと，従って，何日か生活を共にする必要があること，④，居住が生活を共にしてみると，例えば，食事時の「家族の皆と食べる」という状態が，単に時間的な条件にすぎなかったり，「夜」と「お夜」のコトバの相異から生ずる回答のちがいなど，調査において注意すべき重要な問題のあることを知った．